

老子化胡説の由來 (承前)

名 畑 應 順

四

化胡思想を説く獨立の經典としての化胡經の作者は西晋の王浮なりと傳へられる。此説は慧皎の高僧傳一帛遠傳(縮致二一四)に記されたるを以て、現在では最古の記録とする。同傳に曰く、

又見祭酒王浮、一云道基士公、次被鎖械、求祖懺悔、昔祖平素之日、與浮每爭邪正、浮屢屈、既瞋不自忍、乃作老子化胡經、以誣謗佛法、殃有所歸、故死方思悔、

王浮の論敵なる帛法祖は晋惠の末年に張輔なるものゝ手にかゝり、非命の最後を遂げておる。桑原博士は此事實に基づきて、斯經僞作の年代を定められた。即資治通鑑に据れば、張輔は永興二年に戰死しておるから、王浮の道經を作つたのは其以前に溯るべく、従つて西紀三百年前後の頃に當るといふのである。然し乍ら慧皎が既に一云道士基公と附加し、梁代にても作者に就ては曖昧であつたことを示しており、又冥界に關する奇怪な傳説を附帶してゐるのを見ると、斯經の格段的な作者及其年代に對しては、到底的確なる斷定は期し難い。佛祖統記三六(縮致九五二)に東晋成帝の咸康

六年の條に繋げられた如きも、固より信をおくに足るまい。然し次下に述べる如く法輪が辯正論に引いた晋世雜錄にも、王浮を作者としておるから、吾人は化胡經に對して王浮の手が加つてゐることは認めねばなるまい。同時に桑原博士が推定せられた時代に、整つた形に於て化胡經が世に出たことも承認してよからう。

遮莫化胡說を成すべき思想は上來述ぶる如くかなり以前から存するのであるが、今化胡經の作者を王浮とするも、王浮は斯の如き思想を縦横に織込んで彼自身經典を根本から創作したのであらうか、それとも他に粉本ともなるべきものがあつたのであらうか。高僧傳はたゞ作化胡經といふておるだけであるから、其邊が明かでない。然るに辯正論五(縮露八_左四)には晋世雜錄を引きて、其書の全然改作に過ぎないことを語つておる。即曰く、

晋世雜錄云、道士王浮、每與沙門帛遠抗論、王屢屈、遂改換西域傳爲化胡經、言喜與耕化胡作佛、佛起於此

又同六(縮露八_右五六)にも、

案晋世道士王浮、改西域傳爲明威化胡經、乃稱老子渡流沙、敎胡王、爲浮圖、變身作佛、方有佛興、

と述べておる。此等の説によれば、明かに化胡經は西域傳なるものゝ換骨奪胎であつて、果して坐

道祖の晋世雜錄の説とすれば、信憑するに足るであらう。茲に勢ひ西域傳なるものが問題となつてくる。是等が漢書や後漢書の西域傳でないことは確かである。後漢書の西域傳には明帝が使を天竺に遣はしたことが、楚王英や桓帝が浮圖を好信したることなどを載せておる所を見れば、范曄の用ひた從來の西域關係の材料の中に、浮圖に關するものゝあつたことは慥かであるが、化胡的色彩を帯んだ語は之を見出すことは出來ぬ。そこでどうしても嫌疑のかゝるのは上引の三國志及辯正論に出た魏略の所謂西域傳である。三國志の方は之を西戎傳といひ、辯正論の方は之を西域傳といふておるが、其兩文は上述の如く多少趣を異にしてゐるけれども、齊しく敎胡を云ふておる。王浮はやはり是等に据つたのではあるまいか。而して此三國志及辯正論所引の西域と同異は且く別として、辯正論五には尙他に西域傳なるものゝ文を引用してゐる。卽

案西域傳云、老子至罽賓國、見浮圖、自傷不及、乃說偈供養、對像陳情云、我生何以脫新本改云佛生何以

晚佛出一何早新本改云泥洹一何早不見釋迦文、心中常懊惱、

といふものであつて、老子が佛の在世に會はざるために戀慕傷懷したものである。卽下に説く老子が佛を師とする説に近い。従つて前掲三國志及辯正の二文に民を敎へて浮屠たらしむるといふが如き老子とは餘程其面目を異にするものであつて、到底之を同一視することは出來まい。然し共に化胡思想は濃厚に現はれており、且孰れも變化身を説かないのは一致しておるように思ふ。王浮の化

胡經には辯正に示すが如く教胡王、爲浮圖、變身作佛といふておるのは經の經たる所以でもあり、一段の進化ではないかと考へられる。

王浮の作つた化胡經がどれ位の大きさのものであつたかは、是亦問題である。佛教の經錄には斯經が夙に正化内外經なる經名に於て錄されておるが、其最も古きは隨法經の衆經目錄であつて、同錄二（縮結一一〇）衆經疑惑の下に

正化内外經二卷一名老子化胡經、傳錄云、晋時王浮作

と載せてある。靜泰の衆經目錄四、道宣の大唐内典錄十、孰れも之を踏襲しておる。然るに明倅等の大周刊定衆經目錄十五（縮結三六五）には、麗藏では一卷となつておるが、宋元明三藏はやはり二卷となつておる。智昇の開元釋教錄でも、諸藏對校すれば之と同じ關係になる。從義の止觀輔註（三大部輔註卷十三）には、

化胡經、晋時王符所撰、文有一卷、後人添成十一卷、餘曾讀之、其間倒錯訛僞、不可備舉云云といつて、原形は一卷としておる。此說に依つたものか、後世王浮の經は一卷であつたといふ說が有力であるが、予は寧ろ古き諸經錄に従つて二卷とするを自然なりと考へる、孰れにしても化胡經の原形は極めて小部のものであつたことは首肯せられると思ふ。それが後に加上せられて大部なものとなつたらしい。

日本國見在書目に、老子化胡經十なるものが出ており、近來燉煌から化胡經の第一及第十卷が現はれたので、石室遺書の補攷の中に羅振玉氏は次の如く考證しておる。

老子化胡經、一焚於唐、再燬於元、故諸史志既不著錄、道藏亦無傳本、惟晁氏讀書志及日本國見在書目有之、此殘卷存第一及第十、卷一前題作老子西昇化胡經、卷十前題作老子化胡經玄□、而兩卷之後題則均作老子化胡經、晁錄及日本現在書目所著錄三老子化胡經十卷稱名及卷數並與此同、是此本與晁本日本本合

然るに従義は前掲の如く、後人添成十一卷といひ又佛祖統記三十六(縮九五右)にも補註を引き、更に詳しく第五卷までの梗概を記してゐる。

補註云、其文本一卷、其徒増爲十一卷、第一卷說化闍賓胡王、第二卷俱薩羅國降伏外道、第三卷化維衛胡王、第四卷化闍賓王兄弟七人、第五卷化胡王、經十二年、皆偷竊佛語、妄自安置、十卷說と十一卷說とがあるわけであるが、要するに従義の云へる如く是等は孰れも、原始化胡經ではなく、後人の増添した所である。而して斯くの如き化胡經の加上は恐らく東晋から南北朝時代を通じて道教が佛教と接觸するにつれて、逐次行はれて行つたもので、一旦夕に行はれたものではあるまい。従つて統記に示すが如く老子が各地に趣きて、諸種の人々を教化する段取りに仕組まれ、後には遂に八十一化の説さへ生ずるに至つたのである。又化胡の名を冠した經典が單に一種に止ら

ず、幾種類も現出したことが察せられる。最初王浮の作つた經は辯正論の説によれば、明威化胡經といふ名目となつてゐたが、笑道論には化胡消冰經なるものが二箇所引かれてある（これは新舊唐志に各化胡消冰經一卷として載せられしものと或は同書かとも思はれる）。又笑道論や辯正論に引く化胡經なるものは、下に説述する如く假令其名目を同じくしても、其思想に於て全然相反するものがある。此の如きは全く同名異經としなければ考へられないことである。唐書藝文志に載する戴詵老子西升經義一卷及韋處玄集解老子西升經二卷の如き、孰れも化胡の文字はないけれども、笑道論に引く西昇經や燉煌出土經の老子西昇化胡經の類ではないかと思はれるが、勿論之を慥むることは出来ない。羅氏が單に後題と出たゞけの卷數で日本本と燉煌本とを同一視する如きも、或は危険ではあるまいかと考へる。若し夫れ經題は化胡といはずしても、化胡思想を説く經典に至つては、到底三五に止まらなかつたであらう。續高僧傳二十三（縮致三七〇）に出ておる元魏の止光元年に曇無最と清道館道士姜斌とが論戰した時、姜斌の論據とした老子開天經なるものも、其名は化胡といはざるも、其内容は全く化胡説に過ぎなかつたようである。又二教論に引く西昇玄經、笑道論に引く玄妙內篇、玄妙經、文始傳、廣說品、造天地經等の如き、悉く化胡を明説せるものである。六朝から隋唐へかけて世に出大道經の中には多分に化胡思想が現はれてゐたことが推想せられる。從て其所説には彼此相矛盾せるが如きは當然免れざる所であつたであらう。又時には同一經典と雖前後

撞着せることもなかつたといへない。佛教の護教部諸典に引用せられてある道經の化胡說なるものが、實に種々雜多であり、同じく化胡の名を冠する經典にさへ、其說の全く相反するものゝ存するは、恐らくかゝる事情に由來するものだらうと思ふ。

五

以下吾人は笑道論及辯正論に引用せられてある化胡經の諸文を主とし、其他佛教の護教部典籍に引用されし道書中の化胡思想を參究し、以て道教勃興時代に於ける化胡說に如何なるものがあつたかを檢尋してみよう。

一般に化胡說といへば、單に老子が西に行つて胡國を化したとか、佛になつたとかいふ極めて簡單なことに考へられておるが、勿論原始の意味はさうでもあらうが、後の化胡經には色々複雑な内容が盛りられてきて、化胡といふことにも種々の意味が生じてきたものゝ如くである。其著しきものを少しく次に列擧してみれば、

(一) 老子佛となるの説

此説は最も古くから行はれ、已に襄楷傳にこのことを述べておる。化胡經では笑道論第五條(縮露五^{四六}右)に引かれたるものに、

化胡消冰經皆言、老子化闍賓自爲佛、

といふもの正しく是である。然しこの消冰經の説では老子其人がさながらにして佛になつたと見らるゝが、同じく佛になつたといふにも之を化身的に説くものがある。笑道論第五條に玄妙内篇を引

き、
玄妙篇云、老子入關至天竺維衛國、入於夫人清妙口中、至後年四月八日剖左腋而生、舉手日、
天上天下唯我獨尊、三界皆苦何可樂者、

といふものは即化身説に外ならない。此説は願歡の夷夏論にも引用して、佛道調和の根據となつてゐる。

(二) 老子迦葉となるの説

笑道論第十八條(縮露五_右四_八)に

化胡經云、乃至老子去復百年、舍衛國王果生太子、六年苦行成道、號佛、字釋迦文、四十九年
欲入涅槃、老子復見於世、號迦葉 云云

といひ、同第十九條に、

化胡經云、周莊本初三年太歲丙辰、白淨王子既得正覺、號佛釋迦、老子見其去世、恐人懈怠、
復下多羅聚落、號曰迦葉、親近於佛、焚屍取骨、起塔分布、

といひ、又辯正論五(縮露八_右四_六)に

化胡經云、老子知佛欲入涅槃、復廻在世、號曰迦葉、於娑羅林爲衆發問

とあるが如き、孰れも老子が迦葉に化生するの說である。

(三) 迦葉老子となるの說

此說は前說と正反對であつて、道徒の捏造としては心得難き說ではあるが、化胡經の中に此意を示したものがあつたらしい。卽笑道論十四條(縮露五四七_左)に、

化胡經曰、迦葉菩薩云、如來滅後五百歲、吾來東遊以道授韓平子、白日昇天、又二百年、以道

授張陵、又二百年以道授建平子、又二百年以道授午室、爾後漢末陵遲、不奉吾道云々

といひ、同第十九條に、

老子化胡歌曰、我在含衛時、約勅瞿曇身、汝共摩訶薩、寶經來東秦、歷洛神州界、迫至東海

間、廣宣世尊法、教授聲俗人、與子威神法、化道滿千年、年滿時當還云々

といふものは、孰れも之を明言してはゐないけれ共、其意は迦葉の老子に變現することを示すものと見做してよからう。

(四) 老子佛を師とするの說

辯正論五(縮露八四四_右)に、

化胡經云、罽賓國王疑老子妖魅、以火焚之、安然不死、王知神人、舉國悔過、老子云、我師名

佛、若能出家當免汝罪、其國奉教皆爲沙門也

といひ、又道安の二教論孔老非佛第七（縮露五_左四〇）の下、及笑道論第三十四條（縮露五_左五二）に西昇經及符子を引きて、

西昇玄經云、吾師化遊天竺善入泥洹、又符子曰、老子之師名釋迦文

と述べ、或は笑道論第五條に文始傳を引き、

文始傳云、吾師號佛、佛事無上道

と記するが如きは、皆老子の師を佛とするものである。又笑道論第三十四條（縮露五_左五〇）に、

化胡云、願將優曇華、願燒梅檀香、供養千佛身、稽首禮定光、又云、佛生何以晚、泥洹何以

早、不見釋迦文、心中大懊惱

とあるも、恐く老子が佛を師として尊崇した態度を語るものであらう。

（五） 尹喜佛となるの説

老子が其弟子尹喜を佛とならしめたといふ説は笑道論第五條に文始傳を引き、

委尹喜爲闍賓國佛、號明光儒童

といひ、又辯正論五（縮露八_左四四）に王浮の西域傳を改作したことを述べて、次に、

喜與聃化胡作佛、佛起於此

と説くが如き是である。

(六) 老子の妻佛となるの説

笑道論第五條に廣説品なるものを引きて曰く、

始老國王聞天尊說法、與妻子俱得須陀洹果、清和國王聞之、與群臣造天尊所、皆向日昇天、王爲梵王三首、號玄中法師、其妻聞法同飛爲妙梵天王、後生罽賓、號憤陀力王、殺害喜道、玄中法師須化度之、化生李氏之胎、八十二年剖左腋、生而白首、經三月乘白鹿與尹喜西遊、隱檀特三年、憤陀力王獵見便燒沈、老子不死、王伏便剃髮改衣、姓釋、名法、號沙門、成果爲釋迦牟尼佛、至漢世法流東秦、

此説は頗る本生譚的色彩を有するものである。而して(四)の老子佛を師とする説の反對であつて、老子の妻が後に釋迦となり、老子が之を教化したといふ複雑にして而も奇怪至極な傳説である。

以上六説の中で(三)及(四)の説の如き且く別として、餘地の説は孰れを見ても、道教の教權擁護に便利なだけ、それだけ佛教の估券にかゝはる説である。仍て此問題を中心として起つてきた佛道の前後優劣の爭議は實に支那宗教史上の一偉觀であつた。佛教徒の之に對する策略は從來諸學者に依つて言れたが如く、二途を以てしておる。即一には歴史的に佛の年代を老子以前に溯らせること、二には教理的に老子を以て本地菩薩の垂迹であると説くものとである。今吾人は且く前者を描

きて、後者に關して少しく論述し、以て此稿を終ることとする。

六

佛敎が支那の聖賢に對して本迹關係を説くのは餘程舊古に溯る。先づ其代表的なものとしては、古い所では吳の支謙譯なる佛説太子瑞應本起經を擧げねばなるまい。同經卷上(縮辰十_{三七})に曰く

及其變化、隨時而現、或爲聖帝、或爲儒林之宗國師道士云々

是強ち支那の聖賢を意味するものとは云へぬかもしれぬが、少くとも其語が假令漢譯として無理からぬとはいへ、支那固有の敎學を代表するものに對して極めて親しみ深い言辭が用ひられておる。それで後に齊の顧歡の如き其著夷夏論に此説を用ひて本迹説の論據としておる。上述の葛洪の神仙傳に引かれた老子が代々國師に生るゝといふ説の如きも、或は佛經のかゝる説に影響せられたものでないかとも考へられる。下つて東晋の帛尸密多羅の所譯なる佛説灌頂經になると、佛が三聖を震且へ遣はすといふ説が出てくる。同經卷六(縮成六_{四九})葬法を述ぶる下に曰く。

閻浮界内有震且國、我遣三聖、在中化道、人民慈愛、禮儀具足、上下相率無逆忤者、乃至佛告阿難、震且國中又有小國、不識真正、無有禮法、但知殺害、無有慈心、三聖敎化、遺言不著、至吾法滅千歲之後、三聖又過、法言衰薄云々

三聖の何者を指すかは明示されてないけれ共、兎に角佛が之を震且に遣はすといふ考が斯經に出て

おるのは、瑞應本起經よりは一段と明白なそして具體的な垂迹の事實を説いたものとして注意すべきことである。是等の考を本にして爾後化胡經を反駁すべき僞經が陸續として世に出てきた。そして現存の文献中其最も原始のものと思はれるのは、劉宋の惠通及僧敏が夷夏論に對して試みた駁論の中に引かれたものである。先づ弘明集七(縮露四三九左)に載せし惠通の駁論に曰く。

經云、摩訶迦葉、彼稱老子、光淨童子、彼名仲尼、

同卷僧敏の戎華論に曰く。

經云、大士迦葉者老子其人也、故以詭敎五千翼匠周世、化緣既盡、廻歸天竺、故有背關西引之邈、華人因之作化胡經也、

二論俱に經名を出さないが、明瞭に迦葉を老子に配し、或は光淨を孔子に當てゝおる。宋代既に名を經に假りて、道徒の化胡説を反駁すべき説が行はれてゐたのは疑ない。下つて北周の道安の二敎論服法非老第九(縮露五四〇左)には、清淨法行經及須彌四域經といふ二經を引きて、同じく本迹説を示しており、一層詳細になつておる。

清淨法行經云、佛遣三弟子震旦教化、儒童菩薩彼孔丘、光淨菩薩彼稱顏淵、摩訶迦葉被稱老子、乃至須彌四域經曰、寶應聲菩薩名曰伏羲、寶吉祥菩薩名曰女媧

(瓊邪代醉編三十一所引の法行經は之と稍異り、迦葉を老子、淨光を孔子、月明儒童を顏回とす)

こゝに引く二經中、清淨法行經は僧祐の出三藏記集四（縮結一左^二）に出で、衆經目錄二（縮結一^{一〇}）には衆經疑惑の條に出ず。又智昇の開元釋教錄十八には疑惑再詳錄（縮結五右^{三四}）に收め、記說孔老顏回事と注してゐる。道安自身も此經を引き乍ら、其僞經なるを知り、

然法行經者無有人翻、雖入疑科未傷弘旨

と甚だ若しい辯明をしてゐる。法琳の破邪論上（縮露八左^四）にも此經を引いておる。又須彌四域經は衆經目錄二（縮結一右^〇）には衆經僞妄の條に收め、大周刊定衆經目錄十五（縮結三左^{六四}）には僞經目錄に、開元錄には疑惑再詳錄に收めてゐる。辯正論六（縮露八五^一）及道綽の安樂集下左^{一五}にも此經を援引してあるが、就中安樂集には二教論の引く所よりも其前後が詳しく出てゐる。曰く、

天地初開之時、未有日月星辰、縱有天人來下、但用頂光照、用爾時人民多生苦惱、於是阿彌陀

佛遣二菩薩、一名寶應聲、二名寶吉祥、卽伏憺女媧云々

この説によれば、彌陀が二菩薩を遣はしたこゝなり、以下に二菩薩の働きが説かれてある。經文を取意する道綽の常として、恐らく原文のまゝではあるまいが、大體の説相がよく窺はれる。尤も此經は別に老子に就ては説かないが、支那の古聖に對する垂迹説の一種として併せ注意すべきものと思ふ。此外に尙空寂所問經及造天地經なる經典も法行經などと同様のことを説いたものゝ如くである。前者は辯正論六（縮露八五^一）に引かれてある、

空寂所問經云、迦葉爲老子、儒童爲孔子、光淨爲顏回、

斯經も衆經目錄以下諸經錄皆疑經としておる。但し注意すべきは、此經は具には空寂菩薩所問經と名け、法滅盡經或は法沒盡經とも名けられ、他に同名の異經が二本存して甚だ紛れ易いことである。即支謙譯と竺法護譯と今爰に掲げた偽經と同名の經が都合三本存したわけである。内典錄二（縮結二四四）支謙所譯の中に、

法滅盡經一卷 初出、或云法沒盡經、或云空寂菩薩所問經、

竺法護所譯の中に（同四七）

法沒盡經一卷 或作滅字、一云空寂菩薩所問經、第二譯、與吳世支謙出者同、

同十歷代所出疑偽經論錄（同二六）に、

空寂菩薩所問經一卷 一名法滅盡經、偽妄非護所出

と記しておるのは、三者の別を明白に示したものだといはねばならぬ。又開元錄も疑惑再詳錄中に此經を收め、

空寂菩薩所問經一卷 一名法滅盡經、法經錄云、此、經爲妄炳藏、固非竺護所譯、 右空寂所問經、謹按群錄、己經兩譯、恐濫竊真

名 故兩存其目、又有法滅盡經一卷、即是異名、不復重載、其法滅盡經、大小二乘偽錄皆載者誤也

といふて眞僞を峻別せんと力めておる。又天地經は破邪論上（縮露八四）に引く。

内典天地經曰、佛遣三聖化彼東土、迦葉菩薩彼稱老子

特に内典の字を冠しておるのは、道經にも同名の經があつたが爲(笑道論所引)、特に簡別の辭を置いたものと察せられる。靜泰錄四疑僞の下に此經を收めておる。又破邪論上(縮露八左^三)には老子大權菩薩經なるものを引きて、同じく迦葉の震旦化遊を説いておる。

以上吾人は佛弟子や菩薩と支那の賢哲との間に本迹關係を説く諸經典を列示したが、相手の化胡經の説が雜多であるが如く、佛經の説も假令相矛盾せざるまでも、多少は錯雜しておるのを見る。例へば須彌四域經は且く別として、餘他の佛經の説を比較すると、(一)清淨法行經の説と空寂所問經の説とは相合す。(二)惠通所引の經は獨り光淨を孔子とし、餘經は儒童を孔子とす。(三)迦葉を老子とするは諸經皆同じ、(四)狼邪代醉篇所引の法行經は孔老の配當は惠通の經に等しく、儒童を顔回とす。而も光淨を顛倒して淨光とし、儒童に月明の二字を加ふ。

化胡經に關しては、尙攻究すべき事が多く残つてゐる。唐代に入れば、此經を中心として教界に雜多の問題を惹き起した。教義的にも色々の變化があつたようである。燉煌出土經によれば、摩尼教とも交渉を持つに至つたことが知られる。又ずつと下つて元代には恐らく唐代までのものとは別種と思はれる化胡經が世に行はれたようである。化胡經史、或は化胡思想史一般に就て詳細に考究して行けば、當然其等にも論及せねばならぬが、今は且く主として化胡思想の由來に關して考究を試みた迄であるから茲に一先づ筆を擱くこととする。(完)